

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 阿部 幹雄
論 文 題 目 中国近代文学における「文学」をめぐる言説の系譜
—五四新文学、プロレタリア文学、そして魯迅について—
学位取得年月日 2010年3月23日

本論文では、中国近代文学において「文学」がどのように対象化されてきたかを考察する。「近代」（英語ではmodern、中国語では「現代」）という歴史の一段階において、中国では「文学」という名のもとに何を語る事が可能になったのかをみていくとともに、教育制度や出版資本の発展といった物質的条件ではなく、書き手の思考や記述を規定したという意味で秩序化された「近代文学」という制度が、どのように批判され乗り越えられようとしたか、その経緯を本論文では検証している。

本論文は全部で四章構成となっているが、まず第一章ではまず近代中国の文学者であり、中国近代文学史において重要な文学結社である創造社の中心人物であった成仿吾の初期の文学観を検証し、中国近代文学の礎となった五四新文学言説の特徴をあきらかにする。「言説」とは、個々の発言を規定してしまう構造のことであり、個々が無意識のうちに囚われてしまう言語の秩序である。五四新文学言説に特徴的なのは、具体的な差異が抹消されることで成立する抽象的な語彙によって、現実了解が可能であると思わせることである。従来の文学史的記述では思想的傾向の違いなどが強調されてきたが、実は五四新文学の草創期にはわずかな例外を除いて、その言葉の磁場から逃れられたものはほとんどいなかった。成仿吾のデビュー当時、いわゆる「芸術のための芸術」と称された文学傾向は、例えば「人生のための芸術」を志向した一派と厳しい対立関係にあるとされてきた。しかし、本論文では、彼らが、ともに差異が抹消された「抽象的」な言説空間のなかで思考をし、発言していたことをあきらかにすることで、「五四新文学」という「言説空間」とは、あくまで「抽象的」な思考・実践の次元に留まり、「具体性」を回避する形で秩序づけられていたということをあきらかにする。そしてそのような「言説空間」がいかに書き手の思考・発言を規制させる装置であったかがあきらかになることで、従来の文学史的記述では違うとされてきた作家たちの同一性がむしろ明確になるのである。

第二章以下では、「抽象的」な語彙に基づく現実了解を可能にした「五四新文学」の「言説空間」が、どのように対象化され、批判・克服されようとしていくかを検証していくことになる。国民革命、第一次国共合作の崩壊、四・一二クーデター、共産党の武装放棄路線の敢行という目まぐるしく日々刻々と変化していく形で展開していく政治状況に対して、「抽象性」にとどまる

「五四新文学」は対応できず、ここで初めて一般的に「五四新文学」の限界が議論されるのである。第二章では、「『文』と『言』の分裂」という形で具体的に問題化された「五四新文学」の限界へのあらわれを、特に茅盾を通してみることになる。茅盾は新興階級(プロレタリアート)という新しい読者層を対象とする新しい文学形態(プロレタリア文学)を採用するにあたって、自らが中心となって提唱した「白話文」という「五四新文学」を支えた文学言語が、プロレタリア文学へ「発展・飛躍」する際の、障害となる可能性に、期せずして触れてしまったのである。第二章では特に「五四新文学」への「限界」のあらわれについての指摘が中心となる。

第三章では「抽象性」に基づく現実了解を可能にした「五四新文学」の「言説空間」が「プロレタリア文学」の提唱によって大きくかえられていく過程をみていく。元来、プロレタリア文学の提唱は、教条的なマルクス主義を主張した政治的な分派活動とみなされ、提唱者たちの理論的核心はあまり研究の対象とはなっていない。しかし彼らの理論がもたらした大きな貢献とは、(1)五四新文学が志向した「リアリズム」と呼ばれる文学言語を批判し、新しい「文学」のあり方を主張した。(2)「階級意識」の導入により、知識人のプロレタリア革命を実践するにあたっての新たな役割を定義した。(3)資本主義についての総体的な把握により、社会について新たな分析・批判の方法をもたらした、以上の三点にまとめることができる。まず(1)であるが、プロレタリア文学提唱の中心であった李初梨は、文学を現実の単純な反映とみなす「観照—表現」という五四以来主流であった文学言語観を批判し、文学を、現実を忠実に再構成する描写の手段としてではなく、「現実」を構成する一イデオロギーとして捉えなおした。それまで現実理解の有力な手段であると思われていた「抽象的」な語彙(=観念)が、ブルジョアジーという歴史的に形成された一階級の階級的利益を代弁するものでしかなく、「普遍的」であろうとすること、それ自体の虚偽性を指摘したのである。それは「抽象性」による思考が可能かつ有効であるとの「幻想」を散布してきた五四新文学言説そのものへの根本的な批判であり、またその「普遍性」に依拠して思考されてきた「文学」が対象化された嚆矢として画期的なものであった。つまり李初梨の提唱した「プロレタリア文学」理論とは、普遍的な「客観的事実」などというものは存在せず、意識によって「現実」はいかようにも変容するとして、「客観性」を装う文学言語の「作為性」に鋭い対象化の視点を投げかけたという意味で、五四以来の文学言語に関する観念を相対化した画期的なものであったといえる。ここにおいて「五四新文学」は初めて脱神話化され、新たな「文学」の在りようが思考され始めたのである。彼らの主張は、単に革命宣伝の文学を求めていたのではなく、制度化されつつあった「五四新文学」を対象化し、はては解体せんとする厳しく鋭い批判であったのだ。

次に(2)であるが、提唱者たちは、新たに社会関係を「交互作用」の観点から捉えなおした。その「交互作用論」は、下部構造の反映という単純な「反映論」的視点から、経済的なカテゴリ

一でしか資本主義を分析してこなかったそれまでのマルクス主義とは異なり、資本主義を上部構造と下部構造との「交互作用」として総合的に分析する視点を中国に新たに導入したものであったのである。それゆえ新たなる「革命」とは、生産手段の改良といった経済的な変革だけではなく、上部構造も含めた全社会領域の変革を目指すこととなり、資本主義イデオロギーの「批判」と革命イデオロギーの「宣伝」という「文化的戦略」として「文学」は新たに組織し直されるのである。この時、「文学」は一つの特権的かつ独立したものではなく、あくまで全文化的活動における一分野にすぎなくなる。そして、その「文化的戦略」に動員されることで、知識人は革命運動における「批判」と「宣伝」という重要な役割を担うことになるのだが、その時、それまで「自然生長性」が重視されていた実践活動において軽視されてきた知識人の役割が新たに定義されなおすのである。この段階において、それまであくまで自らの外部のものであった「(プロレタリア)革命」というものが、知識人内部の問題として認識されるのである。

最後に(3)であるが、これはG・ルカーチや福本和夫らの「物象化」という資本主義理解の影響を受けているとみなされ、国際的な共産主義運動の同時代性というものを強く意識させるだろう。「物象化」とは本来は社会的関係の総体によって構成されているはずの、ある「もの」の属性が、その起源・歴史的経緯・社会的関係が捨象されることにより、それ自体が自律した永遠不変の所与とみなされてしまうことである。新たなる社会批判は、その「物象化過程」の批判的考察となり、表面的な現象批判に留まるのではなく、その「物象化」された諸々の物神性そのものを分析し解体する方向に移ることで、より総体的な資本主義理解が可能になったのである。

プロレタリア文学の提唱は、革命という政治的な動機からなされたといってもよいが、それとは違い、「文学批判」という意味で共通した方向性は持つものの、魯迅の場合は日々の文章体験から実感的に「近代文学」の限界に逢着してしまっているのである。そのありようを第四章では詳しく分析している。魯迅の場合は、「書くこと」が自身の思想・感情すら十分に表現しきれず、また読者にも自分の文章が意図したとおりに伝わらないという二重の困難に直面したことから来る苦悩であり、絶対的な行為として自明視されていた「書くこと」に対する懐疑である。

「近代」という歴史の一段階が、「書くこと」に自分自身の思想や感情を過不足なく他者に伝達させる行為であることを求め、またそれが当たり前のことだと考えていたとしたら、魯迅のそのような苦悩は、「近代」が「書くこと」に求めた前提と大きく抵触するだろう。ここでは自己表現といった言葉に代表される「書くこと」の前提が成り立たないのであり、魯迅にとって「書くこと」とは、自己を束縛し、規定する絶対的な「不自由」としてしか自覚されなかったのである。

魯迅にせよ、プロレタリア文学を提唱したものにせよ、両者に共通しているのは、超越的な価値として信奉されている「文学」そのものの、その神話性の解体という方向性であり、両者の「文学」についての様々な見解は、中国近代文学史のなかで、貴重な思想的営為であったと考えられるのである。